

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例

D. 産業界、地域社会等多様な社会部門と連携した人材養成機能の強化

④その他

④その他

《人社系》

●神戸大学人文学研究科文化構造専攻

「古典力と対話力を核とする人文学教育」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

- ・当初の計画では、主要な取り組みの一つとして、大学院生が研究成果を一般社会へと発信する「古典サロン」の開催が含まれていた。しかし、開催準備に際しては一般社会のニーズの掘り起こしが難しく、とりわけ多くの聴衆を集める点などで困難があった。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

- ・要因としては、神戸市及びその周辺自治体には既に多数のカルチャースクールや大学の公開講座、サイエンスカフェなどが存在するため、さらに需要を求めるのは困難であった点が考えられる。
- ・また、特命助教を始めとする取組実施担当教員はすでに多くの企画や授業の運営・実施に時間を割かれていたため、アウトリーチ活動まで手が回らなかった点も考えられる。
- ・さらに、本プログラムの進行状況は常時ウェブ上で公開し、Facebook等のソーシャルネットワークサービスを利用して大学院生相互の交流を促進することを心がけたが、ウェブによる情報発信は必ずしも集客効果には繋がらないという点も挙げることができる。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

- ・同窓会の協力により受講者を集め、古典サロンを開催することができた。受講者には概ね好評であり、発表した大学院生からは通常の学会発表とは異なる経験を積むことができ、自分の研究を見つめなおすよい機会になったとの感想が得られた。この点では当初の期待通りの成果が得られたと考えられる。
- ・しかし、こうした機会をさらに増やすことができればなおよかった。一般社会へのアウトリーチに積極的な大学院生は少なくないが、こうした意欲をすくいあげ、教育・研究の場において具体的な形にするためにも、アウトリーチ活動に組織的に取り組む体制の整備が必要であり、また、研究科全体が積極的かつ多面的な広報活動を行うことが不可欠であったと考えられる。